

[月刊] キリスト教書評誌

本のひろば

出会い・本・人

わが身の思いと重ねつつ 松平信久

出版記念講演

『私は私らしく生きる 水野源三詩集』
『水野源三精選詩集 わが恵み汝に足れり』
『水野源三と三浦綾子』を語る 森下辰衛

本・批評と紹介

ケルスティン・ラマー 著／浅見 洋、吉田 新 訳
悲しみに寄り添う 島蘭 進

辻学 著

偽名書簡の謎を解く 永田竹司

榎本保郎 著

教会づくり入門 山北宣久

佐々木勝彦 著

わたしはどこへ行くのか 西谷幸介

清水光雄 著

民衆と歩んだウェスレー 野村 誠

川端純四郎 著

バッハ万華鏡 徳善義和

E.ローマイヤー 著／辻学 訳

聖書学古典叢書

ガリラヤとエルサレム 中山貴子

スコット・マクナイト 著／中村佐知 訳

福音の再発見 小淵春夫

越川弘英 著

信仰生活の手引き 礼拝 小栗 献

明治学院大学キリスト教研究所 編

境界を超えるキリスト教 神田健次

エッセイ

隨筆・詩歌『虹の橋』のはしがきとして
近藤蓉子

既刊案内

書店案内

12 DECEMBER
2013



ドイツを代表する新約学者の集大成、待望の第Ⅱ巻刊行開始!

新約聖書神学Ⅱ 上

フェルディナント・ハーン 大貫 隆・田中健三 [訳]



新約聖書神学の諸課題を取り上げ、新約聖書全体がどのように語っているのかを詳細に解説。上巻では「キリスト教正典としての旧約聖書」「啓示」「救済論」について、その全体像を提示する。◆A5判 上製・642頁・12,600円

続刊 新約
聖書神学Ⅱ下

2014年度
刊行予定!

本書を心から推薦します

青野太潮

西南学院大学神学部
名誉教授
日本新約学会会長



はじめて聖書に触れる中高生の学びのために。
信頼の教科書シリーズ、最新刊!

聖書

福万広信

関西学院初等部宗教主事



キリスト教を初めて学ぶ方へ最適な、旧約と新約の要点を学べる入門書。マメ知識や図版、地図を多く収録した楽しい1冊。◆A5判 並製・96頁・840円



ホームページ更新情報

* クリスマス特集ページ公開中!! *

<http://bp-uccj.jp/publications/christmas2013/>

クリスマスに最適な本が一覧できます。

* 贈り物選びにもぜひご活用ください。*



出会い・本・人

わが身の思いと重ねつつ——松平信久

「私たちの人生行路には何が待ち受けているか分かりません。予想もしなかった悲しい出来事が舞い込むこともあり得るでしょうし、思いがけない苦難に遭遇するかも知れません。そのようなときに頼れる何かを是非見つけておきたいものです」。私はこのような言葉を社会に巣立ってゆく学生たちに毎年饒としておくつていた。しかし今考えれば、それはどこか他人事で、自分自身のこととは蚊帳の外に置いていたように思う。

五年ほど前に、それこそ思いもかけず、私は階上からの転落事故を起こし、全身に損傷を受けた。八ヶ月間の入院生活での手術、リハビリなどのおかげで家屋内ならばなんとか自力での歩行ができるまでになったが、残念ながら今もって四肢の機能の大幅な改善は見られず、体中の硬直や、痺れに伴う痛みにも常時さいなまれることになってしまった。

以前から三浦綾子氏の作品には親しみを覚え、心を動かされてきた。多くの三浦文学ファンと比べて、質量共に豊かで深い読み取りをしてきたとはとても思えないが、感銘を受けた作品を数え上げることはできる。自伝三部作、多くのクリスチャンの生涯や献身を描いた作品群、人の心の深層に淀んだ重くどす黒い思いや

欲望を追求した著作など。数奇な運命と人との出会いが織りなす『海嶺』のような歴史小説。この本については、私たち愛読者数人が「海嶺クラブ」なるものを結成して、主要な登場人物の人間像や歴史的意義を議論したり、他の漂流物語と読み比べをしたりしたこともある。晩年の『銃口』や『母』には胸を抉られるような思いを抱いた。

怪我以来、わが身と重ねるようにして読み返してきたのは『難病日記』である。以前であつてもこの本を読めば心を動かされたことだろう。しかし、今読む思いは、やはり以前とは大きく違っている。この日記に書かれているパーキンソン病も含めて、三浦氏が経験した多くの「難病」に比べれば、私の困難は如何ほどのものだろう。数時間にもおよぶ夜中の立ちすくみなど、想像を超える苦しみに耐えつつ、しかも周りのさまざまな人や「こと」に感謝しつつ送る三浦氏の日々。そこから私が受けるメッセージは、真に頼れる何かをもつことの強さ、深い慰めと癒し、掌のぬくもりを通すようにして伝えられる励ましである。

(まつだいら・のぶひさ 元立教学院院长、立教大学名誉教授)



「水野源三の世界」 展示場で行われた講演会に集った人々

出版記念 講演要旨

『私は私らしく生きる 水野源三詩集』『水野源三精選詩集 わが恵み汝に足れり』

「水野源三と三浦綾子」を語る

本当の暗闇を知っていたからこそ 今も人の心を打ち続ける

もりした たっえ
森下 辰衛

(三浦綾子記念文学館特別研究員、全国三浦綾子読書会代表)

まばたきの詩人・水野源三さんが亡くなって29年。今なお多くの人に愛されているその作品を後世に残すために、日本キリスト教団出版局は2冊の詩集を発行した。それを記念して、東京・教文館のキリスト教書部「ギャラリー ステラ」で「水野源三の世界」展が9月5日から25日まで開かれた。さらに期間中の14日、同会場において、「水野源三と三浦綾子」のテーマで講演会が開かれた。講師は、三浦綾子・水野源三研究者の森下辰衛氏。なぜ今、この二人が注目されるのか。二人が私たちに語り続けるメッセージは何かを熱く語った。

(日本キリスト教団出版局、教文館キリスト教書部 共催)

源三さんと綾子さんのつながり

一〇年くらい前だったでしょうか。私の妻が伝道のために友人と一緒に新宿の歌舞伎町でトラクト配布をしました。何種類かのトラクトを持って行ったのですが、その中に水野源三さんを紹介したものがあつたのです。そしてそこに源三さんの詩「生きる」が載っていました。こんな詩です。

神さまの／大きな御手の中で／かたつむりは／かたつむりらしく歩み／螢草は／螢草らしく咲き／雨蛙は／雨蛙らしく鳴き／神さまの／大きな御手の中で／私は／私らしく／生きる

源三さんは脳性麻痺により、かたつむりのように歩くことさえできず、螢草のように咲くこともできず、雨蛙のように鳴くこともできませんでした。でも「私は私らしく生きる」と、最後にさわやかに宣言しています。

この詩が載っているトラクトを妻はホームレスの人に配ったのです。そうしたら、その人たちがニコニコして受け取ってくださったというのです。それで、「源三さんですごい。社会と人の暗闇まで届く何かを持っている」と言っ、大喜びで帰ってきました。私

になる前はもちろん、なった後も次々と病気をした人でした。こんな二人ですから、生きている間に会うことはとうとうかなわなかったのです。

苦しみの中で、 なぜ喜べるのか

源三さんの詩に「有難う」という詩があります。

物が言えない／私は／有難うの／かわりに／ほほえむ／朝から／何回も／ほほえむ／苦しいときも／悲しいときも／心から／ほほえむ

この詩は、私が初めて出会った源三さんの作品でしたが、本当に衝撃的でした。自分のありさまが根本から問われるような気がしました。源三さんと違い、物が言える私。どこにでも歩いていける私。でも、ありがたうなんて言わないで不平ばかり言っている私。正直、源三さんと比べて何という違いなんだろうと思います。

源三さんは、九歳の時に赤痢による高熱のために脳性麻痺となり、手足の自由、言葉の自由を奪われました。最初は少しの間だけ話せた時期もあつたようですが、その時に口か

は、源三さんという人は本当にそういう人だったなと思うのです。

この源三さんと三浦綾子さんには、深いつながりがあります。綾子さんの夫の光世さんが『信徒の友』の短歌欄の選者をしていました。ごく初期から源三さんは短歌を投稿し続けていました。それがきっかけで綾子さんも源三さんのことを知るようになりました。

そしてもう一つは、榎本保郎牧師の存在です。榎本保郎牧師はアシラムセンターから源三さんの詩集を出しましたが、綾子さんに序文を書いてもらっています。この序文だけでも素晴らしい名文です。綾子さんが本当に感動して源三さんの作品を紹介していることがよくわかります。

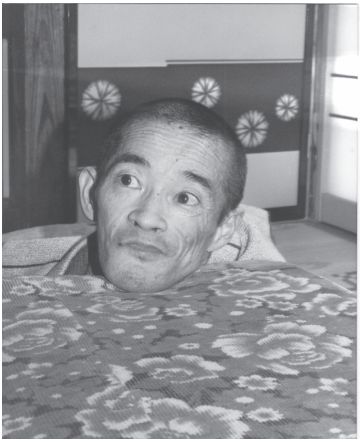
一方、源三さんも三浦綾子作品の読者でした。寝たきりで、人にページをめくってもらわなければなりませんでしたが、綾子さんの本を何冊も読みました。ですから、源三さんも綾子さんに会いたかったし、綾子さんも源三さんに会いたかったと思うのです。でも、それは実現しませんでした。

源三さんは部屋から一歩も出られない体です。隣の部屋に移っただけでも体の調子が悪くなるという人でした。一生に一度も教会には行けませんでした。一方綾子さんも、作家

本当の暗闇を知っていた二人

ら出たのは「死ぬ、死ぬ」という言葉だった
そうです。「こんなだったらもう僕、死に
たい」という意味の「死ぬ、死ぬ」という言
葉でした。でも、その同じ源三さんが後に、
「苦しいときも、悲しいときも、心からほほ
えむ」「有難うのかわりに、ほほえむ」と言
うのです。なぜそんなことが言えるのでしょ
うか。

綾子さんも若い時に結核、脊椎カリエスを
経験し、晩年には癌とパーキンソン病になり
ました。でも、「神さまは私に癌もくくださ
った。何て神さまは私をえこひいきしてくださ
るんだらう」と言うのです。そして最後には、
「私にはまだ死ぬという大切な仕事が残って
いる」と言い続けました。



水野源三さん

私はこの二人には共通なものがあると思う
のです。結論から言えば、二人は本当の暗闇
本当の絶望を知っていたということです。も
う自分を愛せないということ、もう自分の人
生にいいものなんか何も残っていないと言え
るぐらいのところまで行った人だったと思
います。

本当の地獄を、真つ暗闇を知っていた人だっ
たと思うのです。
でも私は、そうであるがゆえに、二人は本
当の光を知った人たちだったとも言えると思
います。そして、それは自分で見つけたとい
うより、彼らの叫びと祈りに応えられる形で
光が与えられたのだと思うのです。

綾子さんは戦争中に軍国教師として熱心に
働き、敗戦になった時に、今まで真剣に教え
ていた教科書に墨を塗らなければならぬとい
う経験をします。自分のそれまでの人生に
墨を塗る……。それは、自分が生きている意
味、価値、全部を否定する経験でした。

その綾子さんが結核になった時にこう言う
のです、「ごまあみろ。とうとう私も肺病に
なった。とうとう来るべきものが来た。私に
対する罰なんだわ」と。いかに自分を愛せな
かったかということ。自分の人生にいい
ものなんかもうないんだと思ひ込んでいまし
た。真つ暗です。同じように源三さんも、手
も足も動かない、口もきけない、そしてそれ
は一生治らないと言われた時、本当に真つ暗
だったろうと思います。二人は、そうやって

何で憎たらしい言い方でしようか。でも前
川さんもすごかった。そのように吠えている
綾子さんの中に、本当に渴いている魂、「神
がいるならば本当にそれを知りたい」という
渇きがあることを見逃さなかったのです。だ
から、その日から前川さんは、綾子さんのた
めに手紙を書き続け、訪問をし続けたのです。
やがて綾子さんは前川さんの背後に、不思議
な光を見るようになります。「その光は何だ
らう、キリスト教なんだろうか」と思いなが



三浦綾子さん

ら、引かれていくのです。

他方、源三さんには宮尾隆邦という牧師が
与えられました。宮尾牧師は自身が進行性の
筋萎縮症だとわかった時に郷里伝道をしよう
と、源三さんが住む長野県の坂城町に戻って
来た人です。

ある日、その宮尾牧師は足を引きずりなが
ら、杖をつけて水野家を訪れました。源三さ
んの家はそのころ、お母さんがパンの委託加
工販売をしていました。最初はパンを買いに
寄っただけだったので、そして二回目に来
た時に、源三さんに、小さな黒い革表紙の聖
書を置いていきました。源三さんはそれをむ
さばるように読んだといひます。

宮尾牧師について源三さんは「先生」とい

う詩を残しています。

体が不自由になり／赤とんぼを悲しく見
ていた私に／聖書を読み／み言葉を説い
てくれた先生／大きな活字の／大きな聖
書も／読めないほどに／視力がおとろえ
た先生／二十八年間／私のために／父な
る神様に／祈りつづけてくれた先生

宮尾牧師は、晩年には心臓が悪くなっ
て、目も見えなくなっていました。そして
一九七九年四月に天に召されました。綾子さ
んには前川正という人が、源三さんには宮尾
牧師という人が光を届ける人となったのです。

聖書の言葉に砕かれて

源三さんの詩に「私がいる」という作品が
あります。

ナザレのイエスを／十字架にかけよと／
要求した人／許可した人／執行した人／
それらの人の中に／私がいる

源三さんは九歳で脳性麻痺となり、手足で
罪を犯すことも、口で罪を犯すことも、一切
なかった人です。その人が、それにもかかわ
らず、イエスさまを十字架にかけよと要求し、
許可し、執行したのは私ですと告白するの
です。この一事をとっても、源三さんがどん

に深い痛みをもって聖書の言葉をとらえてい
たかということがわかります。源三さんは障
害者です。しかし、障害が源三さんを砕いた
のではなく、聖書が源三さんを砕いたのです。
だから人は源三さんの作品に触れて感動する
のです。

「砕いて砕いて砕きたまえ」という詩があ
ります。

御神のうちに生きているのに／自分ひと
りで生きていると／思い続ける心を／砕
いて砕いて砕きたまえ／御神に深く愛さ
れているのに／共に生きる人を真実に／
愛せられない心を／砕いて砕いて砕きた
まえ／御神に罪を赦されているのに／人
の小さな過ちさえも／赦せられない心を
／砕いて砕いて砕きたまえ

大学で教えていた時に、授業で源三さんの
詩を学生と一緒に読みました。そうすると不
思議なことに、毎年必ず、この「砕いて砕い
て砕きたまえ」が好きだと言う学生がいたの
です。

私たち人間の中には、「私は悪くない」「悔
い改めなんか必要ない」と思うかたくなな心
と、もう一つ、「全部砕かれて新しくなりた
い」「ごめんなさい」と言えて新しくなれたら、
どんなにいいだろうか」と思う心と、二つあ



講師の森下辰衛氏

るのだろうと思うのです。だからクリスチャンではない人も、源三さんの詩を読んで感動するのだと思います。

最初、源三さんは、「死にたい、死にたい」という言葉がいっぱい詰まった心の持ち主でした。でも救われた時に、「ありがとう」「碎きたまえ」でいっぱい器になっていきました。本当に暗闇を知り、その中で光を知った人だからこそ、その作品がクリスチャンでない人の心も打つのではないのでしょうか。

生きている生かされている菌が痛き手足がかゆき咳が苦しき

菌が痛くても手を菌に当てることができないう、手足がかゆくてもかくことができないう、咳が苦しくても水を飲んだりマスクをしたりすることができない源三さん。でも、それを

通して「生きている」と言っているのです。

いくたびもありがとうと声出して言いたしと思ひ今日も暮れゆく

毎日、ありがとうと声に出して言いたいことはたくさんある、でも言えない、言えずに今日も日が暮れてしまったという単純な短歌ですが、何と豊かでしょうか。

一人びとりに道がある

三浦綾子には三浦綾子を助ける人が、水野源三には水野源三を助ける人が与えられていました。前川さん亡き後は三浦光世さんがその役目を果たし、源三さんには母やめじさん、義妹の秋子さん、高橋三郎先生が与えられました。

殺したいのです。

でも、神さまはそんな絶望に沈む一人びとりを本当に大事な仕事に用いたのです。その事実を知っている綾子さんは、生かされている限り一人びとりに必ず道はある、希望はある、奇跡はあると語ってやまないのです。

「見よ、悔る者よ、驚け。滅び去れ。わたしは、お前たちの時代に一つの事を行う。人が詳しく説明しても、お前たちにはとうてい信じられない事を」（使徒言行録13・41）という言葉が聖書の中にあります。

「おまえなんかもうダメだぞ」という声が源三さんの耳にもどれだけ聞こえたことでしょう。でも、それを全部ひっくり返して、到底信じられないほどのことを一人びとりの人生の中でなしてくださる神さまがいるということ。私はそれをこの二人が証明してくれていると思うのです。

最後に一つ、源三さんの詩を紹介します。「蜘蛛」という作品です。

臥す窓から／今日見たよ／雪晴れの空から／柔らかな陽がさしてきたら／神さまが／生かしておられる／小さな蜘蛛が／かすかに動くのを

これは源三さんの最晩年の詩です。その年の冬は雪が多くて、源三さんは風邪をひいていて、その風邪が長引いていました。やわらかく触れる天からの日差しがやさしさと細やかさがここに書かれています。そして、神さまが一つ一つの小さな命にどんなふうにも目をかけて生かしておられるかということ、感動をもつて書いています。

源三さんはいつも伏していました。私たちも伏すことがあります。伏す時に私たちは窓を見上げます。伏した者にとって、窓は上の高いところにあります。

さらに、一人びとりに道があるということも思いまます。綾子さんには綾子さんの道があり、作家として神の愛を語る本を書き続けていきます。光世さんには、その妻を支え、最後はパーキンソン病の妻を看取るという道があります。源三さんには源三さんの道があり、お母さんにもお母さんの道があり、宮尾牧師には宮尾牧師の道があります。一人びとりに道があるのです。それぞれの道は違うけれども、神さまはこのように一人びとりを本当に大事に使ってくださる方なのです。

綾子さんは何度も言いました。「神さまは知らない人間をおつくりになるような愚かな方ではありません」と。それは、綾子さん自身の体験から出た言葉です。前川さんが死んで自分の病気がどんどん悪くなって、そして自分の病気のためにお父さんの借金が膨らんでいる時に、「おまえはいらない人間だ、おまえなんか生きていても仕方ないぞ、おまえの人生に、もういいものなんかないぞ」と、悪魔がギブスベットのの中にいた彼女の耳にささやき続けました。彼女はそのささやき声を本当に知っています。

苦難の中にある時、もう道が見いだせないと思える時に、人はそういう言葉に耳を傾けやすいのです。悪魔はそうやって綾子さんを

寝転がると、その窓を通して見えるのは空です。天です。そして、伏した者は、どうしてこんなことが起きたんだろうと思ったり、「主よ、どうして私をお見捨てになったのですか」と思ったりします。でもそのまなざしが天に向かっていく時に、天の窓から、いつかやわらかな日差しが差ししてくるのだと思います。一心に待ち望む心に、いわば祈りの応えが来るのです。

それを証ししながら、そして、やがて来てくださる方への喜びと期待も込めながら源三さんはこの詩を書きました。まさにそちらを向きながら天に帰って行かれたのだと思います。

もちろん、綾子さんも同じように天からの答えを聞き、一心にそちらを向きながら天に帰って行かれました。二人は共に暗闇を経験し、その中で共に光にあずかったのです。

水野源三の詩を 味わい尽くす詩集



TOMO
セレクト

私は私らしく生きる 水野源三詩集

森本二郎 写真
中村啓子 朗読

47編の詩を森本二郎の美しい自然の写真、中村啓子の心のこもった朗読で彩るオールカラーの豪華愛蔵版。

B5判上製・64頁・2940円



水野源三精選詩集 わが恵み汝に足れり

森下辰衛 選

398編の詩を精選して収録した水野源三詩集の決定版。多種多様な信仰の詩が私たちの心を打つ。

A5判上製・240頁・2730円

日本キリスト教団出版局
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457
E-mail: eigyou@bp.ucci.or.jp (価格税込)
<http://bp-ucci.jp>

豊かな素材を提供してくれる好著

ケルスティン・ラマー著

浅見 洋、吉田 新訳

悲しみに寄り添う

死別と悲哀の心理学



島蘭 進

深いきずなをもった他者との別れはその人の生きる意欲を萎えさせてしまうことがある。親、配偶者やパートナー、子ども、兄弟、親しい友人との死別によって深い悲しみに陥り、なかなか立ち直れない人もいる。地震や水害などの災害や交通事故・飛行機事故のように、予期せぬ出来事で突然の死に見舞われたときの親しい人々の衝撃はいかばかりだろう。病気等で予想された場合でも、その死を受け入れるのは容易ではないことが多い。自死者の場合、周囲の人々の苦悩は想像を超えるものだろう。

喪失による悲しみ(悲哀)は多岐にわたるが、重要な他者との別れ、とりわけ死別による悲しみは克服が容易でない。かつて、それは宗教や共同体を通して受け止め、克服されていくものと考えられていた。だが、伝統的な枠組がもはや身近でない生活が当たり前になってきている。そこで死別や重い喪失による悲しみを受け止める場が新たにもうけられるようになってきた。グリーフケアというものだ。

『悲しみに寄り添う』はドイツでグリーフケアに携わってきた女性研究者ケルスティン・ラマーの、博士学位論文をもとに

「仕事」を助けていくことだ。

その後、エリック・リンデマン、メラニー・クライン、ジョン・ボウルビー、ピーター・マリス、シュトロベ夫妻らによって「悲しみ」の心理学は深められていく。リンデマンは「歪んだ悲しみ」の症候という概念によって、立ち入ったケアが必要な悲しみの様態を示していく道を開いた。ボウルビーは赤ん坊の愛着行動に注目し、愛着と一体のものとしての悲しみを捉える道を開いた。マリスやシュトロベ夫妻は、「情緒」と同時に「意味」に力点を置いた認知心理学的なアプローチによって「意味の喪失と回復」の問題として悲しみを捉える道を開いた。また、キュブラー・ロス以来、喪失に直面して体験するさまざまな悲しみの段階についての諸説(段階モデル)があるが、むしろ「喪の仕事」の諸課題を列挙する課題モデルに可能性があるのではないか、等々の提案がなされている。

本書は心理学的な諸理論の紹介・検討に特徴があるが、また、

した二〇〇四年刊行の書物の第三版(二〇一〇年)を訳したものだ。「訳者あとがき」によると、ドイツの大学で神学を学んだ後アメリカでチャプレン教育を受けたラマーは、ドイツのプロテスタント(福音主義)教会(ルター派)の聖職者資格をもち、フライブルグ福音主義単科大学で「魂のケアと牧会心理学」の教授を務めている。なお、英語の「grief」にあたるドイツ語は「Trauer」だが、本書では文脈に応じて「悲しみ」「喪」「悲哀」と訳し分けられている。

グリーフケアについての書物が増えている昨今だが、本書の特徴は、グリーフとグリーフケアについての心理学の諸学説をまとめ、それに沿ってグリーフケアの実践を解説しているところにある。悲しみと「喪の仕事(作業)」「グリーフワーク」についての心理学の源流としていつもあげられるのは精神分析の創始者、ジークムント・フロイトであるが、本書も同様だ。愛のエネルギーを向ける対象が喪われること(対象喪失)が悲しみの原因だが、喪失した人と自分の関係について追想しつつ繰り返し考え直していくことによって悲しみの打撃は克服されていく。これが「喪の仕事(作業)」だ。グリーフケアは「喪のなせ今グリーフケアが必要なのか」という問題に応答しようとしているのも示唆的だ。死と死別の悲しみが医療に囲い込まれ、私的な事柄になってしまっていることが現代人の精神文化を貧しくしている。他方、従来の宗教的な儀礼やケアでは、現代人の求めに十分に応じきれない。だが、宗教が現代人の死や悲しみに応じることは、本来の宗教のあり方から逸脱していくわけではない。キリスト教にとっては、その教義の新たな意義を見出していく好機ともなりうるのだという。

「悲しみ」は冷静に理解することが難しく、またそれだけでは不十分かもしれない主題だが、本書は主題の求める実存的な姿勢と学術書としての知的距離感が適度に均衡している。現代における宗教や死生観のあり方を考える上でも、豊かな素材を提供してくれる好著である。

(しまの・すずむ)東京大学名誉教授、上智大学教授
(四六判・一六八頁・定価一八九〇円(税込)・新教出版社)

大切な方へ、祈りのことばを贈る物に 祈りの小径

小島誠志 小林 恵 写真

「信徒の友」巻頭の「祈り」から29編を精選し、彩り豊かな写真と、日々の信仰生活を支える、心に響く祈りの言葉を紹介。A5判・64頁・1,890円



マタイ福音書を読む1 一步を踏み出す

松本敏之

マタイ福音書の通説を導く3巻シリーズ。1巻は降誕物語から山上の説教まで。「八つの山上の祝福」と「主の祈り」の詳しい講解を含む。四六判・234頁・1,890円



ニューセンチュリー聖書注解 コリントの信徒への 手紙一、二

F.F.ブルース 伊藤明生 訳
定評ある堅実な注解シリーズ。当時の社会背景を踏まえ、使徒パウロの宣教の真意を読み解く。A5判・330頁・5,460円

CD版 讃美歌21による 礼拝用オルガン曲集

第1巻 礼拝
飯 靖子 / 志村拓生 演奏
楽譜版に収録の全38曲を曲集の編者が演奏した模範演奏CD。各曲の演奏に使用したストップ・リストを収録。38曲収録・1,575円

日本キリスト教団出版局
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18
☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457
E-mail eigyoku@bp.uccj.or.jp (価格税込)
<http://bp-uccj.jp>

第二パウロ書簡の偽名性に向き合う立体的理解
辻 学者

偽名書簡の謎を解く パウロなき後のキリスト教



永田竹司

本書の内容は、大きく二つの課題のもとに構成されている。第一は、本書の中心問題である偽名書簡という事柄自体についての考察である(第一章、第二章)。批評的聖書学は、パウロによる執筆を明記する一二書簡のうち、広く「第二パウロ書簡」と称されている六通をパウロの名を騙る偽名文書であるとす。このことは、聖書の真正性を擁護する保守にとっても、批評的研究者自身にとっても、さらには、偽名書簡であることを知りつつもパウロの言葉として宣教する説教者にとっても、困惑であり続けている。そこで著者は、この偽名性の問題に正面から向き合う。偽名性の困惑を和らげるさまざまな学説(例えば二〇頁、その他)が歴史的根拠に欠けることを指摘し、むしろ古代社会においても偽作は原則的には批難の対象であったと論じる。ということは、偽名文書であることが露呈しないようにすることが際だって重要なことになる。第二パウロ書簡が偽作を真正文書と信じさせるためにいかにかの工夫をしているかが、興味深く論じられている。

本書を構成する第二の部分が本体である。第二パウロ書簡を

差なかつた(四二〜四五頁)としても、現代の真筆性の倫理的意識と第二パウロ書簡の著者たちのそれが重なるかどうかは、議論の余地がある。偽作行為に対する批判を自覚しながら、それを正当化できたのは、アレクサンドリアのクレメンスやオリゲネスも容認する「良い目的のために嘘は許される」という理屈があったからであろうと説明されている(六二頁)。しかし、評者が理解する限り、聖書の言語表現の多様な解釈の可能性を無視する議論を使用してイエスの受肉を否定する論敵に反駁するために、言語表現の多義性を主張する文脈で「有用な嘘」に言及しているだけである。

むしろ、他方で、著者自身が的確に指摘している通り、内容の正当性・非正当性が真贋評価に重要であり、内容が正当でなければ偽りの著者ではないかと疑われたという観察こそ重要であろう(特に七八頁以下)。もちろん、虚構作品の場合でも、伝達しようとした受信内容の信頼性を損なわないように、偽名

扱う一般的な順序ではなく、著者が考えるこれらの偽名書簡の執筆年代順ということでⅡテサロニケ書(第三章)、コロサイ書(第四章)、エフェソ書(第五章)、牧会書簡(第六章)の順で論じられている。批難の対象になる偽作であることを自覚しつつ、なんとかしてパウロの真正な書簡と受け取られる工夫をしてまで、なぜこれらの偽名著者が書簡を執筆したのか、その動機と目的は何であったのか。本書の著者は、個々の偽名書簡が前提にしている真正なパウロ書簡との比較作業および考えられるパウロ後の歴史的状況の考察という二つ視点から、第二パウロ書簡を立体的に洞察・展開している。従来の一般的理解の再吟味を促す議論が多く認められ、刺激的である。

第七章が、第三の構成部分で、全体のまとめである。ここで、そのまとめの内容を紹介することは控えたい。ぜひ本書を読んでいただきたい。

さて、本書の興味深さにもかかわらず、必ずしも説得的とは思えなかつた点は、偽作行為の正当化の説明である。偽り、あるいは偽ることに対する一般的批難が古代も現代も基本的に大書簡が想定する読者の事実認識を逆でなしに工作をしても不思議ではない。古代ユダヤ世界においても初期キリスト教世界においても、多くの偽名文書や匿名虚構文書が産出され、文書にしる、伝承にしる、その起源は重要な人物名に帰された。この現象は、信仰共同体の関心が当該の書物なり伝承なりの起源についての史的真正性に向けられていたのではなく、伝達された書物あるいは諸伝承が共同体の信頼を得る内容であるか否かに向けられていたことを指し示していると思われる。新しい歴史状況に適應する(おそらくフィクションを含めた)創造的で自由な解釈に開かれた解釈共同体の姿を十分に考慮に入れる必要があるように思われる。

歴史的問題のみでなく、解釈学的課題も投げかける本書が多くの読者に読まれることを願ってやまない。

(ながた・たけし 国際基督教大学名誉教授)

(四六判・二三三頁・定価三二〇円(税込)・新教出版社)

聖公会出版

— 近 刊 案 内 —

なぜ教会へ行くの パンとぶどう酒のドラマ

著●ティモシー・ラトクリフ 監修●若城聡/伊達和良
訳●声屋聖マルコ教会翻訳の会 (四六判) 並製 2,940円

カンタベリー大主教がレントラックとして依頼した本。カトリックの修道士である著者は「見えないドラマが、私たちの人間性の核心部分で展開している」と語る。人が、神に感謝や賛美を表す本来の意味を解き明かす。



不信心な人 ケリイ神父とその生涯

著●ヒバート・ケリイ 編●ジョージ・エヴェリー 訳●信岡章人 (四六判) 上製 2,000円

1891年英国ケラムに「聖使修士会」を創設したケリイ神父の生涯とその働きを記した書。伝統的なアングリカニズムを守りつつ、エキュメニカル運動を牽引した同神父は、現代の聖公会の神学に多大な影響を及ぼした。



〒162-0814 東京都新宿区新小川町9-1
☎03(3235)5681 FAX 03(3235)5682
http://seikokai-publishing.jimdo.com
nask-bookshop@company.email.ne.jp

色褪せない、迫力ある語りかけ
榎本保郎著

教会づくり入門



山北宣久

召天せられ三六年になる榎本保郎牧師の復刻本が刊行された。「彼は死にましたが、信仰によってまだ語っています」（ヘブライ一章四節）そのものの内容である。

本書は一九七〇年四月より一年間『信徒の友』誌に連載されたものが一冊に纏められたものであり、「あとがき」の日付には「一九七二年五月五日（誕生日に）」とある。ということは四七歳、召天五年前の著述であるのだが改めて天折が惜しまれる。

一年間の連載であるゆえに「教会づくり」は二回から成り立つ。「だれが教会をつくるのか」「聖霊体験について」「教会づくりのコツ」「説教の秘密は何か」「なくてはならぬものは何か」「交わりにあずかる」「地域社会における教会」「わたしたちの献げもの」「教会が無気力なのはなぜか」「保育園、幼稚園は教会のわざか」「世の光こそ教会の本質」「岩の上に建つ教会」がその項目となる。

これら一つ一つのタイトルで一冊の本が書けただろうが、師はまさに「入門」にとどめた。それはこれを読む者が、この入門書をもとに各々に実践編をものにして欲しいという願いがある。

そして信仰によって働く愛というこの三つの柱こそ、教会づくりの根幹ではないでしょうか。（二九—三〇頁）

「今語りかけたもうみことばに対して、どこまでも聞きいっていく人びとによって、主を待つ教会は形成せられていく。」（四五頁）

「互いに祈り合うこと、来たりたもう主に向かって生きること、そして主を喜ぶこと、この三つがわたしたちの教会づくりに対して与えられているつとめである。」（五四頁）

「今日の世は涙を流してくれるものを期待していません。死に勝つ勝利がほしいのです。」（六二頁）

「主の強制に服したもののだけが、嵐の中でイエスを神の子と告白することがゆるされた……教会づくりはこの一事に尽きる。」（一二二頁）

ピンピン心に響き、グングン魂に迫ってくるのではないか。一九七〇年の連載と言えば教会は嵐の只中であつた。

つたものとも受け取られる。しかし、この「入門」はコンパクトであるとともに内容が濃い。そしてこの二二編を裏打ちすべく「祈りの生活」「礼拝の心得」が付けられている。

四〇年以上の時を経ても全く色褪せないばかりか、教会づくりの現実に鋭く切り込んでくる迫力を有するのは「きのうも今日も、また永遠に変わることのない方」（ヘブライ二二章八節）に堅く根差しているからに他ならない。

教会修養会や研修会、懇談会等のテキストに用いられるならば、具体的な示唆、刺激、激励を与えられるだろう。診断書と処方箋となる本書を、教会、これを支える信徒に勧める。

幾つかの言葉を紹介すれば、その裏付けとなろう。「教会づくり」ということは信者をつくるだけではない。（二七頁）

「愛は常に相手のために破れること……そして十字架のあとに復活があつたように、破れることにおいて新生するところに教会の姿がある……わたしたちはあまりにも破れることを恐れない。」（二九頁）

「みことばへの聴従という信仰、聖霊を待ち望むという希望、

「教会は『戦争責任告白』や『反万博』に端を発した運動を謙虚に受けとめ、そこで問いたもう主に向かってみずから再検討し、み旨の示すところに向かって大胆に行動していかねばならぬと思います」（一四九頁）といわゆる問題提起に理解を示している。

しかし「教会解体」の不当性、激しい造反運動の限界をはっきり語りつつ「集められた教会」「散らされた教会」という命題のもとにこの悩める問題を取り扱っている。

このことにもその時代の現実に深くコミットしながら、福音の普遍性を示す深さ、広さがあらわれている。

本書の魅力は著者自身が「教会づくり」に苦闘し、時に挫折を味わい、時に喜びを与えられた生々しさにもある。その経験にあつて豊富な例話、何よりも適確なみことばの引用が生きてくるのだ。

（やまきた・のぶひさ 青山学院 院長）
（小B6判・一五四頁・定価二二六〇円（税込）・教文館）



新刊



日本における聖書翻訳の歩み

上智大学
キリスト教文化研究所 編
●四六判並製 定価2,100円

福音書翻訳のむずかしさ
—個人的所感
佐藤 研

フランススコ会聖書研究所
訳注の合本刊行を終えて
—伝統的釈義と現代の釈義の相克
小高 毅

日本における聖書翻訳の歩み
渡部 信

ケケン語訳聖書から
セケン語訳聖書へ
山浦玄嗣

キリシタンは聖書について
何を学んでいたのか
—ヘドロ・ゴメスの
『神学要綱』に見る聖書理論
佐久間 勤

LITHON [リトン]

〒101-0061 千代田区三崎町2-9-5-402
FAX 03-3238-7638

フロム、フランクフル、ティリッヒの思想研究の格好の手引き
佐々木勝彦著

わたしはどこへ行くのか 自己超越の行方



西谷幸介

著者の前作『愛の類比』（教文館）は、キング牧師、ガンディー、マザー・テレサ、神谷美恵子を扱った著作であったが、今回はフロムとフランクフルとティリッヒを取り上げる。なぜ、この三人の思想家かと言えば、一つには、「E・フロムとV・フランクフルの本は、今なお一般書店の本棚の一角を占有して……読む人が絶えないからであり、ティリッヒに関して言えば著者の神学的関心の大きな一角を占めてきた人物だったからであらう。

しかし、より深い問題意識は、彼らが「一九三〇年代のナチズムと戦争に翻弄された三人」であったという指摘に窺える。彼らが「二度にわたる世界大戦とナチズム体験」という「目の前に突然現われたクレバス」を「どのルートを通って……渡ろうとした」のか、それがわかるならば、「東日本大震災を契機に」、現代人の「自己超越」にそれが「ないことがはつきりした」「緊急停止装置」の問題も、「少しちがってみえてくるかもしれない」、だからそれを探ってみよう、というのが、読者への本書の意義についての著者の説明である。ナチズムと大震災

は時と形は違っても、「突然のクレバス」として一つなのである。

なお、現代人の「自己超越」とは、「現状にとどまることに満足できず、常に新たなものを求めて前進しようとする人間の内的欲求」——これは「クリエイティヴィティとも呼ばれる」——であり、そこに「アクセルはあっても、肝心の緊急自動停止装置がついていない」と述べられる。東日本大震災の余波も「人災と認めず、生き残るためと称して、負の遺産をさらに増やそうとする人びとが力をふるって」いる現状がそれを象徴している。

以上が本書の「はじめに」と「あとがき」のパラフレーズで描き出される著者の問題の意識であり設定である。しかし、なぜ、フロムとフランクフルとそしてティリッヒなのかを、本書の内容そのものに入り込みながら、もう少し敷衍すれば、次のように言えるであろう。哲学史においてはサルトルに極まってしまいう「二〇世紀の実存主義」を、「なんとかして科学的に確認しようとした」のが「深層心理学」（フロムやフランクフル）で

あったが、精神治療者たちが患者のために「科学が働くことを望んでも」、それが「技法」として用いられる限り、実は彼ら自身がその営みの意義について確信をもちえない。

それについて、精神医学の真理契機を十分に認めつつも、なお「信じながら（それについて）語り」、そこから人間の魂への「配慮」を体現していたのが、ティリッヒであった。それゆえに、多くの精神医学者たちが「治療者にとつての治療者」であった「ティリッヒのもとに来た」（ロロ・メイ）のである。しかも、倫理的重荷から現代人を解放することで重宝がられる深層心理学が、それに比例して倫理との取り組みの弱さを露呈するのにたいして、ティリッヒがなお神学的に倫理を説いたところに、彼固有の意義が認められる。

著者が本書の「無意識のモチーフ」と言う「神秘主義と社会倫理の関係」、「深層心理学と宗教の関係」の骨格を、取り上げられた三人の関係において、評者なりに描き（穿ち）出すとすると、大体以上である。「自己超越」とは、単に人間の「クリエイティヴィティ」の視点からでなく、やはり「生きた」超越的存在との関わりでなく、確認しうる事柄であろう。以上は

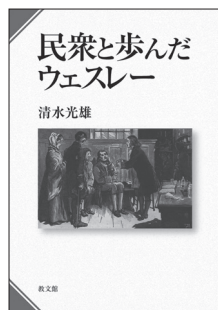
著者が明示的にはほとんど語っていない本書の「モチーフ」であるが、本書理解のためには必要であろうと思ひ、表題・副題を意識しつつ、触れてみた。

キリスト教圏では偉大な神学者・哲学者・思想家の解説・解釈がそれ自体で尊ばれてきた。ある意味で本書もそのジャンルに属する労作であろう。三人の思想家の、略年譜、選択された主要著作の——丹念に選択された決定的引用文を示しながらの——解説、加えて著者自身の問題意識に基づく論評が、提示される。興味深いのは時代毎の複数邦訳の比較も用いての解釈である。思想（家）の厳密な研究というのは、このようになされる（べきな）のだ、という手本が示されている。これから思想研究（とくに三人に関わる）に向かおうとする方々には、その意味で、とりわけお薦めの書物である。他方、彼らについてはもう卒業したと思っておられる方々にもお勧めしたい。再確認のみならず再発見が提供されるであろう。ティリッヒのために重要な弁明もそれとなくなされている。

（にしたに：こうすけ＝青山学院大学国際マネジメント研究科教授）
（四六判・三〇八頁・定価一八九〇円〔税込〕・教文館）

魂の救いと体の癒しを求めた伝道者
清水光雄著

民衆と歩んだウエスレー



野村 誠

本書は、ウエスレー・メソジズム研究者として著名な清水光雄先生が、四冊目の研究書として出版された書物である。

一冊目は、米国における著者の博士論文をまとめた『ジョン・ウエスレーの宗教思想』（日本基督教団出版局、一九九二年）。二冊目は、静岡英和女学院短期大学の学生にメソジストの思想を伝えたいとの願いから生まれた『ウエスレーの救済論——西方と東方のキリスト教思想の統合』（教文館、二〇〇二年）。そして、同学院四年制大学新設に合わせて誕生したポラントイヤセンターを拠点に展開された大学の諸活動の中から生まれた『メソジストって何ですか——ウエスレーが私たちに訴えること』（教文館、二〇〇七年）が、第三冊目である。その中心テーマ「愛の実践」について、一般信徒向けに、ウエスレーの時代の社会問題を解き明かしながら、尚且つ、今日的課題に目を向けさせてくれるのが、本書、『民衆と歩んだウエスレー』である。

さて、本書の舞台は十八世紀英国。産業革命期の重労働にあえぐ貧しい労働者の傍らには富を手にした富裕層も救いを求

め、「メソジストは金持ちと貧困者との混合体」であった。故に、「貧富の亀裂を起ささないために」ウエスレーは尽力した。ウエスレーにとつては「どの階層の人も神の子」であり、たとえ貧困者であっても、レプタ二枚を捧げたやもめのごとく、自分よりもさらに貧しいものを支援することが求められた。ウエスレーにとつて、貧困問題は、最低賃金とか国家の経済問題ではなく、神と人とを愛する「良心の問題」であった。「愛と共感」はメソジスト神学の心臓部で、富者も貧者も「すべてのメソジストは他者の霊的生活のために協調的支援の責任を果たすこと」が期待されていた。

ウエスレーは、国教会の聖職者でありながら、貧困者や病人への支援活動に乏しい国教会を内側から改革・再生するためにメソジスト運動の指導者となった。彼は多くの人々に神の愛を語り、その結果、沢山の貧しい聴衆がメソジストに入り、それゆえ、貧困者の生活や健康を支えるためのあらゆる取り組みが必要不可欠になっていった。

その為の貧困者支援金を管理・運用する班会と組会を設立。組会指導者は定期的に地域の病人を訪問し、魂と肉体の健康増進に役立つ助言が出来るように尽力することが求められ、財政的業務を担当する執事は、金銭面での正確さや注意深さが求められた。こうして地域の支援ネットワークは整備されていった。

ウエスレーにとつて、「貧困者への伝道」という生涯にわたる使命を果たすために起こり得るあらゆる課題を克服する為に、乗馬での読書が役立った。彼は、多読・速読の名人だった。医者でない彼が『根源的治療法』を出版し、「安価で、安全で簡単な治療」を貧者に提供することができたのは、多くの医学的資料を読破していたのみならず、ガリレオ、ベーコン、ニュートンなどの近代科学をはじめ、薬学や栄養学にも造詣が深かったから可能であったと言えよう。

同様に、炭鉱夫の子供の救済の為に、キングスウッドに学校を設立した時にも、又、「無利子ローン企画」によって貧困者

の小ビジネスをたすけることが出来たのも、その根底には、人間や社会・経済への深い理解と洞察があったからである。

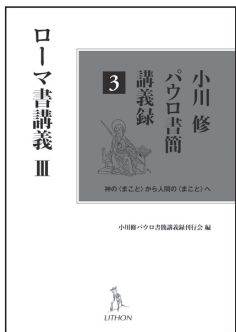
十八世紀英国において、ウエスレーが、キリストに倣って、病者を見舞い、寄り添い、諸科学の力も借りて、魂と肉体を癒し、社会支援のネットワークを広げていった精神と方法を学んだ時、

「あなたがたは、どう生きるのですか？」
ウエスレー研究者、清水光雄は、最後に、鋭く、我々に問いただしているように思われる。

（のむら・まこと）共愛学園前橋国際大学准教授
（四六判・二四〇頁・定価一九九五円〔税込〕・教文館）



新刊



小川修パウロ書簡講義録3

ローマ書講義Ⅲ

小川修パウロ書簡講義録刊行会編

●A5判上製 四〇六頁 ●定価三一五〇円

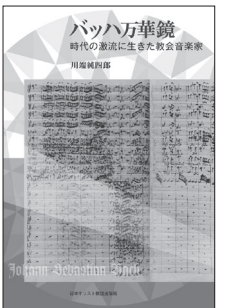
小川修先生が長年追い求め掴まれた福音理解は、同志社大学神学部大学院での三年間（二〇〇七〜一〇年）に亘るパウロ書簡講義に結実したと言っても過言ではない。ひとこと言えば、「神の（まこと）から人間の（まこと）へ」というパウロの福音理解であった。

LITHON [リットン]

〒101-0061 千代田区三崎町2-9-5-402
FAX 03-3238-7638

バッハの謎解きに取り掛かった書
川端純四郎著

バッハ万華鏡 時代の激流に生きた教会音楽家



徳善義和

著者川端純四郎さんは恐らく本来の企画より早い一応の完結を考えて、最後の章「『口短調ミサ曲』の謎」を構想していたことだろう。ご夫人の「あとがき」に記されているように、ここに記されたこの章の構想を残して、^病年余の闘病の後五月二十五日に召された。緊急に出版された遺稿『バッハ万華鏡』を、主の平安を祈りつつ紹介したいと思う。

前著『J・S・バッハ 時代を超えたカントーレ』が出版されたときも私はこの「本のひろば」で紹介した。「バッハを研究するのに信仰などという主観的なことを言っては邪魔になる」というようなことを言ってはばからないバッハ研究者（それも大御所と言われる人）がいる日本で、著者はユニークな、しかしまともな（ということとは信仰の人バッハ自身に即した）バッハ研究者だった。ルーテル教会の信仰者、教会音楽家バッハをめぐる、その上で自らの信仰実存においてバッハを理解しようと努めた人だったからである。前著はその角度からのバッハ伝だった。

今回はバッハを取り囲む諸相に即して、歴史的な資料に当た

って検証し、バッハ解釈の手掛かりを提供し、これに即した自らのバッハ理解の一端を示そうと試みている。しかも同時に、読者それぞれにもそれを促そうと挑戦しているように思える。ルーテル派正統主義改革運動に立って、ルーテル教会の礼拝音楽に即した音楽活動に生きたバッハを私自身は思い描こうとするのだが、著者はこの同じ背景の前に立つバッハを、本書の帯の表現によれば、「時代の激流に抗した」教会音楽家として描き出そうというところで、私との違いも感じ、著者の面目躍如たるものも感じている。著者自身正しい意味で「抗する人」だったと敬しているからである。

今回のバッハ論において著者が選び出した諸相は「教会」、「聖書と賛美歌集」、「ヨハネ受難曲」、「オルガン」、「バッハ家の人々」である。いずれのテーマに関しても可能な限りで当時の、それもなかなか目に触れることの難しい資料にまで当たり、研究論文に触れている。「礼拝と音楽」連載各回の注が今回も巻末にまとめられ、いずれも的を射た研究姿勢を示しており、後学の人にとって刺激となろう（その研究文献や資料もかかる

べく若い研究者に引き継がれることを願っている）。

私の関心からして、バッハの生涯に即して辿れば、その足跡は若い日のリユーベックへの旅、ブクステフーデとその音楽との出会い、その背後にいたルーテル派正統主義改革運動のH・ミユラー（後にバッハはこの人の受難節説教集による自由詩の作詞をピカンダーに求めて、『マタイ受難曲』を作曲した）への注目に始まる。カルヴァン派のケーテンで宮廷音楽に励んでいたバッハが生まれてきた二人の子どもの洗礼をめぐって悩み、ルーテル派正統主義が教えるところへの明確な回帰を目指したことも注目させられる。だから厳格なくつもの誓約書に署名し、市議会の検閲にも遭い（『ヨハネ受難曲』改稿の次第参照）、軋轢を重ねつつ、二十七年にわたってトマス・カントールの職にあったのである。こうした背景が上述の諸相に即してバッハ自身の生涯にわたってばかりでなく、バッハから見ても二百年前のルーターと宗教改革の時代からかなり詳しく説明されているので

ある。

その集大成として著者が問い続けているひとつの問いがある。前著でもそれは一応の答えをもって示されていたように思う。著者はおおそれを追いつけていた。バッハ生前に実際には演奏されることのなかった（と考えられている）『口短調ミサ曲』の謎である。著者自身がこの本で示そうとした答えをわれわれは読むことはできなかった。この著者のことだから、われわれ自身の信仰実存の中で、それぞれの答えを出す自由を残してくれたのかもしれないと思えてくる。われわれに対する著者からの挑戦でもある。追憶と感謝！

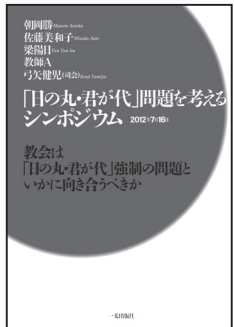
（とくせん・よしかず）ルーテル学院大学・神学校名誉教授
（A5判・二二〇頁・定価二七三〇円（税込）・日本キリスト教団出版局）



「日の丸・君が代」問題 を考えるシンポジウム

教会は「日の丸・君が代」強制の問題と
いかに向き合うべきか

朝岡勝・佐藤美和子・梁陽日・
教師 A・弓矢健児（司会）



信教の自由のために。

わたしたちは、
「イエス・キリストこそ主である」
と告白します――。

A5判・ブックレット
定価 840 [本体 800 +税] 円
ISBN978-4-86325-061-1



株式会社 一麦出版社
札幌市南区北ノ沢 3 丁目 4-10
TEL (011) 578-5888
<http://www.ichibaku.co.jp/>
携帯 mobile.ichibaku.co.jp/

福音書研究の古典に学ぶ原始キリスト教の多様性

E・ローマイヤー著
辻 学訳

聖書学古典叢書

ガリラヤとエルサレム

復活と顕現の場が示すもの



中山貴子

私たちは「ガリラヤとエルサレム」から何を想起するだろうか。イエスはガリラヤに生まれ、神の国の福音を宣べ伝え、弟子たちを招き、病を癒し、罪人・徴税人と食卓を囲んだ。ガリラヤの女たちも排除されることなくイエス運動に加わって、エルサレムに上りイエスの死の目撃者となる。他方エルサレムはイエスの逮捕、裁判、十字架刑死と埋葬に至る受難の地から、イエスの復活・顕現の地、世界宣教への約束の地となる。私たちがもまた福音書のイエスに出会うため時空を超えてガリラヤからエルサレムへと旅をしている。

マルコ福音書におけるガリラヤの持つ意味に注目し、特にエルサレムとの対比を明らかにすることによって福音書研究に多大な貢献したのが、ドイツの聖書学者E・ローマイヤーの『ガリラヤとエルサレム』（一九三六年）である。『マルコ福音書』（マイヤー注解叢書第一巻一九三七年）の補完として出版され、今では入手困難な本書がこの度聖書学古典叢書三冊目として翻訳出版され広く読まれることになったことは思いがけない喜びである。非常に読みやすい日本語訳で、文中のギリシア語、ラ

他方ルカには、復活のイエスのガリラヤ顕現はない。弟子たちへの顕現は、聖霊降臨と世界宣教の起点エルサレムと結合している。ガリラヤはイエス運動の始まりの地ではあるが、その完成であり頂点となるのはエルサレムなのである。ヨハネは、エルサレム顕現とガリラヤ顕現（二一章）が並立している。

しかしローマイヤーの言うように、果たしてエルサレム教会と並ぶような、しかも主の兄弟・親族が代表するような教会がガリラヤに存在したかどうか、またエルサレム教会とガリラヤ教会が異なるキリスト論を代表していたのかどうかの根拠は不確実なため、この解釈は現代では受け入れられていない。だが神学的表象としてのガリラヤに、福音書記者マルコの思想的状況の反映を見るローマイヤーの考察は、後の編集史研究の先駆けとなった。「純粹で学術的な学問作業」としての聖書釈義を信念としていた彼の業績が、色褪せることはない。

本書の出版はナチス台頭の時代であり、彼のナチズム批判と

テン語の翻訳・訳注は言うに及ばず前後の文章の繋がりや補足する書き込み等、読者のための懇切丁寧な配慮がある。本書の主題、論述についての、解題、新約聖書学研究史における評価、著者の経歴等についての「訳者あとがき」も読者のよい手引きである。何よりも翻訳者である辻学氏の本書とその著者に寄せる敬意と翻訳・出版の熱意が伝わってくる。

ローマイヤーによれば、「ガリラヤとエルサレム」は歴史のイエスに遡る単なる地理的表象ではなく、マルコの明確な意図に基づく神学的表象である。原始教会は二重の起源、すなわちイエスとその親族の出身地であり活動の場であるガリラヤ教会と、イエスの死と復活後に世界宣教の使命を帯びるエルサレム教会という二つの中心的教会を持っていた。福音書における復活のイエスの顕現の記述が、ガリラヤ顕現とエルサレム顕現を併記していることがその表れである。マルコには、復活のイエスのエルサレム顕現はない。ガリラヤにおける顕現の予告はあるが、実際の顕現の言及はない。マタイでは、弟子たちがガリラヤの山上で復活のイエスから福音宣教の派遣指令を受ける。

親ユダヤ人の姿勢が「反国家社会主義的姿勢と活動」であるとして大学を追われ、その後一九四六年八月虚偽の罪状による死刑判決を受け九月に銃殺刑、死後五十年を経て死刑判決破棄、名誉回復された。今回この衝撃的な事実を知って、反ナチ抵抗運動の足跡や強制収容所跡を訪ねる旅を続けている私は、深い敬意と哀悼をもって本書を読んだ。現代の「エルサレム」が中央集権的体制の組織となつて、マルコ福音書の証言する多様な人々と共に生きようとする「ガリラヤ」における福音の試みを排除しようとなることがあってはならない。私たちは、「ガリラヤ」に先立つイエスに常にそのことを問われているのではないのか。原始キリスト教の豊かな多様性を真に継承しているのかどうか、昨今の日本のキリスト教会を憂うる訳者の真摯な提言を受けとめ、本書が活用されることを願っている。

(なかやま・たかこ 広島女学院大学名誉教授)
(A5判・二二六頁・定価三二五〇円〔税込〕・日本キリスト教団出版局)

キリスト新聞社の本
Kirisuto Shimbun, Co., Ltd.

11月15日発売予定!



宗教が自然の問題にどう答えるか

自然の問題と聖典

人間の自然とのよりよい関係を求めて
本書は、関西学院大学キリスト教と文化研究センター（RCC）のプロジェクト「自然の問題と聖典」にて研究発表を編集したものである。人間と自然との関係はどうかあるべきであろうか。宗教がこの自然の問題にどう答えるかは、重要な課題である。

四六判 340頁 2,200円

▶神学を学ぶための
必携の書!

キリスト教 神学資料集 上・下

アリストター・マクグラス●編
古屋安雄●監訳

現代キリストの代表的な神学者マクグラスが編集した神学資料集。上巻では「神学の源泉」「神論」「キリストの人格」「キリストにある救い」、下巻では「人間の本性と罪と恩恵」「教会」「 sacrament」「キリスト教と諸宗教」「最後の事柄」までを収録。

【上巻】12,600円
【下巻 ※オンデマンド版】10,500円

キリスト新聞社
351-0114 埼玉県和光市本町 15-51
和光プラザ2階
TEL. 043-424-2067 (価格に税込)
E-Mail. support@kirishin.com
URL. http://www.kirishin.com

オリジナルな「福音」を復元しようとする野心的な試み
スコット・マクナイト著
小村佐知訳
福音の再発見
なぜ救われた人たちが教会を去ってしまうのか



小淵春夫

この夏、イタリアのミラノを訪れ、修復されたレオナルド・ダビンチの『最後の晩餐』を鑑賞した。原画を損なわずに後の加筆、汚れを削ぎ取り、時をへて色落ちした状態のままに、描かれた当時をできるだけ復元したものだという。本書も、まさにそのような試みを「福音」に対して行おうとしているように思う。つまり、「福音」の意味することを、書かれた当時のオリジナルに復元しようとする野心的な試みである。

さて、福音とは信仰義認のことではなかったのだろうか。この当たり前と思ってきた概念への再検討を求めたのはなぜか。それは、第一、二章を読めば明らかになる。そして、その問題提起が射たものであり、著者マクナイトの福音の定義こそが本来の福音だとするならば、本書の指摘は、キリスト教界にじつに甚大な、永続的な影響を与えずにおかないだろう。

福音派（本書では「救い派」）の本流で育った評者にとつて、新しく示唆されることが本書に数多く書かれている。当然と思ってきた福音理解の前提や構造の変革を求められるものがある。そのすべてに即座に賛同していいものか、慎重になりたい気持ち

ちもある。しかしマクナイトは、新約学の専門家として聖書に沿って論述していくので、私には危険性を感じられなかった。

そこで求められるのは、こちら側の聖書の読み方の再検討と福音理解に対するパラダイムシフトである。それを著者は、「使徒的福音」「パウロの福音」「ペテロの福音」「イエスと福音」「福音書の中の福音」というさまざまな角度から検討して、オリジナルな意味を復元していく。そして彼が見出した「福音」とは、「イスラエルの物語の成就としてのイエスの物語」（五六頁）というものである。それが、イエスが伝えた福音であることを浮かび上がらせる。本書でのこれらの探求の過程は、一種の謎解きのような魅力があり、引き込まれずにはおれない。

著者自身もそうだったが、これまでの個人の救いとそれを説得しようとするアプローチを「福音伝道」と私たちが理解してきたのは紛れもない事実だ。それは、福音の一部だけを伝える矮小化であり、それが個人の救いだけにとどまる「救いの文化」を築いたと著者は指摘する。私たちが築くべき「福音の文化」は、信仰義認や神の国の到来を内蔵する、イエスが告げた、よ

り広義な福音の土台の上に花開くべきなのだ。

「福音を個人の救いだけに縮小してしまうなら……聖書すら不要になる」（二〇〇頁）というショッキングな指摘には動揺させられた。だが、聖書に接したこともない一般人の人々に、一時間かかるかもしれない（二二〇頁）物語の全容を伝えて、理解してもらえらるだろうか？ 鎌倉仏教の浄土教は、念仏を唱えれば来世で救われるという、縮小した知らせで日本に広まったのではないだろうか。信仰復興運動に根を持つ福音伝道が、底の浅い個人的な「救いの知らせ」を広めたとすれば、それを深く、豊かな「福音」としていく責務を、なぜ教会が果たせなかったのだろうか？

ダビンチの『最後の晩餐』の修復による発見は、遠近法の消失点が中央のイエスのこめかみにあり、不明瞭だったイエスの口が開いていたことだった。ユダの裏切りを告げた瞬間の絵であると確定できた。マクナイトの探求も、「福音」を明確に位

置つけ、新約聖書全体の構成を俯瞰し直させ、福音とは、イエスがイスラエルのメシアであり、王となった物語であることを明確化した。それが果たして本当かどうかは、重大なテーマである。教職者を含めた読書会を教会で立ち上げ、盛んに議論すべき価値ある本ではないだろうか。もつれた糸をほぐすような複雑な内容の理解を、丁寧で正確な訳文が助けてくれる。

（おぶち・はるおりあめんどう代表）
（A5判・二二六頁・定価二〇〇円（税込）・キリスト新聞社）

公会議開幕50周年にあたり刊行。 旧訳に対し全面的改訂を施した公式訳 第二バチカン公会議 公文書 改訂公式訳

1962年から1965年の間に開かれ、カトリック教会の現代化を図った第二バチカン公会議。その公会議の16公文書の改訂公式訳。総序および各文書解説と索引を付す。カトリック教会内部にとどまるのではなく、すべてのキリスト者、そして現代世界に生きるすべての人々へメッセージを送ることを意図した公会議の精神が、本書により、広く多くの人に届くことを心から願う。



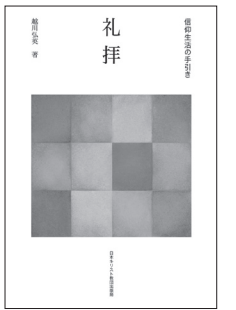
A5判上製880頁 税込3150円

カトリック中央協議会

135-8585 東京都江東区潮見2-10-10
日本カトリック会館 ☎03-5632-4411
<http://www.cbccj.catholic.jp/>

礼拝者が神の大きな愛に包まれていることを実感
越川弘英著

信仰生活の手引き 礼拝



小栗 献

前向きな話題を見出しにくい近年の日本のキリスト教界にあつて、礼拝実践への関心と期待は、とても大きくなってきているように見える。日本語で読める礼拝関係の書籍もこの四半世紀の間に飛躍的に増加し、私の神学生時代からは隔世の感がある。本書の著者である越川弘英さんは、この動きをその中心にいて牽引してこられた方である。

これまでに著者は、数多くの礼拝関係の著作物を翻訳、また執筆してきたが、今回の『礼拝』はそこからの知識と思索と経験をもとに書かれた信徒向けの入門書である。入門書であるからといって決して侮ってはならない。深く掘り下げられた礼拝への理解と省察は、礼拝に責任をもつ教職、礼拝担当者にとって必要不可欠なものである。

一五〇ページあまりのコンパクトな冊子だが、その内容は奥深く実に豊かである。同時に簡潔で読みやすく、そして筋が通っている。それはどこから来るのだらうと思つて、目次を見て合点がいった。本書は三つの章にわかれ、それらの章が三つの部分からなる礼拝の三位一体構造をもっている。どれだけ意識

されたものかはわからないが、すっきりした統一性もちなながら、そこから多様性へと広がっていくような本である。最初の章で著者は「なぜ礼拝をするのか」というテーマと正面から向き合う。著者はこの部分を丁寧な、ご自身の内面的経験も踏まえながら書いている。実存がかかった言葉はたいへん説得力があり、共感する。

第二章では、礼拝の構造、教会暦をその意味を含めて解説した上で、「私たちの礼拝」の多様性に目を向ける。古今東西の礼拝を知る著者が、これだけの紙幅にまとめるのは悩ましかつたらう。だからこそ、著者が考える「礼拝の中心」が抽出されているとも言えるだろう。

最後の章では礼拝と教育、牧会、宣教ということが取り上げられる。著者は「礼拝そのものが目的」であることを強調し、それ以外の事柄が目的化することを警戒している。そのためこれらのことは「礼拝の裏り」であるという慎重な表現をする。しかし、それでもなお、教育、牧会、宣教がいかに礼拝と切り離し得ないものであるかをあらためて教えられる。

本書を読み、強く印象に残った言葉がいくつかあるので紹介したい。一つは「礼拝は遊びに似ている」という言葉である。前述のとおり、著者にとって礼拝はそれ自身が目的である。「遊び」もまたそれ自身が目的である。礼拝とは「神との聖なる戯れ」であり、「まじめな遊び」なのだと言者は語る。なんとも爽やかですてきな発想ではないか？

また著者は、キリスト者であろうとなかろうと、どんな人も「何か」を礼拝しているのではないかと問う。そして結局は「自分自身」を礼拝しているのではないかと、と。


また著者は「現実的」ってなんだ？ と問う。私たちがリアルだとしているものはいつでも相対的なものではないか？ むしろ礼拝を「リアル」なものとして受けとめる時に私たちの生き方が現実的に変わるものであつて、そこにこそ礼拝のリアリティーがあるのではないかと著者は言う。「目からうろこ」が落ちるような思いをもつて読ませていただいた。

著者は本書の中で、四〇冊近い礼拝関係の書籍からの文章を意図的に引用している。そこには、狭い理論に閉じこもることなくさまざまな考えを紹介し、それらを総合し、整理するという著者の意図が感じられる。読者はそれらの書籍からさらに学びを広げていくことができるであらう。

本書は三位一体構造をもっていると述べたが、その全体を貫くのは「神の愛」である。本書は神の愛にはじまり、そして神の愛に終わる。礼拝とは「神の愛の業」なのである。読み終えた読者は、礼拝者が神の大きな愛に包まれていることを感じることであろう。

教職・信徒を問わずすべてのキリスト者に、全面的にお勧めする。コンパクトで比較的廉価であるから礼拝について学ぶ研修会などにも最適である。

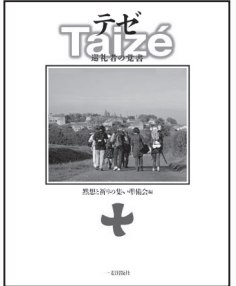
(おぐり・けん) 日本基督教団神戸聖愛教会牧師
(四六判) 二二〇頁・定価一三三六五円(税込)・日本キリスト教団出版局



テゼ

巡礼者の覚書

黙想と祈りの集い準備会*編
Taizé




— 霊性の日常的で具体的な景色 —

巡礼者の目に映る 景色とは。

「スピリチュアリティ」
連載の人気エッセイ
待望の単行本化

A5 変型判
定価 1,890 [本体 1,800 + 税] 円
ISBN 978-4-86325-059-8



株式会社 一麦出版社
札幌市南区北ノ沢 3 丁目 4-10
TEL (011) 578-5888
<http://www.ichibaku.co.jp>
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

《他者への貢献》を志向する多角的アプローチ
 明治学院大学キリスト教研究所編

境界を超えるキリスト教



神田健次

本書は、明治学院の創立一五〇周年を記念して、大学キリスト教研究所の所員・名誉所員二〇名の論文・エッセイをまとめたものであり、歴史研究をはじめ、キリスト教思想研究、実践と現場からの論考など、その内容は多分野にわたっている。

冒頭の大西晴樹「米国長老・改革教会宣教師へボン、ブラウン、フルベッキの功績——W・E・グリフィスによる伝記から」の講演を承けて、第一部「救いと正義——古代・中世社会と宗教」では、成瀬武史「ロゴスの境界——夕日の色や犬の鳴き声はだれが決めるのか?」、千葉茂美「デルポイの神託をめぐって——古代宗教の一面」、久山道彦「オリゲネスにおける戦争倫理学——古代キリスト教における宗教的生の「一面」、手塚奈々子「パドヴァの聖アントニオの説教における祈りと回心」、齋藤栄一「夜の復権——ヨーロッパ美術における月の諸相」の論考が続いている。また第二部「思想と信仰」では、森井眞「今、いや常に、キリスト教は問われている——ジャン・カルヴァンのこと」、佐藤寧「沈黙」と信仰そして愛」、新倉俊一「大いなる記号——ブレイクと大江文学」、中山弘正「キ

リスト者とマルクス経済学」、橋本茂「"jedem das Seine"を巡って——ひとつの正義論」、柴田有「自然にたいする罪」が収録されている。

さらに第三部「近代国家とキリスト教——歴史と省察」では、播本秀史「万人救済説——新井奥澤と内村鑑三を中心に」、加山久夫「賀川豊彦と公共の神学」、遠藤興一「天皇制慈恵主義とキリスト教」、渡辺祐子「キリスト教伝道と国家——不平等特権「寛容条項」の放棄をめぐって」、そして、第四部「キリスト教の実践と現場」では、久世了「キリスト教学校の教育について——明治学院に即して」、深谷美枝「病院チャプレンの実践研究から見た「キリスト教と日本社会」、下田好行「人間における霊性の進化と「キリスト教の秘儀」——ルドルフ・シュタイナーの人間学をてがかりとして」、司馬純詩「キャンパス・ミニストリーの前線にあつて」が収録されている。

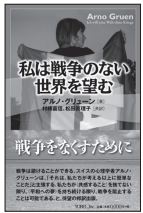
まず注目したいのは、本書が明治学院の一五〇周年の記念としてだけでなく、一九五二年以降の大学キリスト教研究所の六〇年以上に及ぶ歩みにとっても、一つの記念碑的な論文集に

なっている点である。冒頭の大西晴樹氏の講演は、W・E・グリフィスによる伝記を通してのヘボン、ブラウン、フルベッキ等の学院創立に関わる宣教師研究として興味深く、全体の象徴ともなっている。また歴史研究で瞠目すべきものとして、例えば、戦争と平和の問題をめぐるオリゲネスの見解を問い直した久山道彦氏の論考は読み応えがある。

さらに思想研究でも、古代以来、「分配の公正」を意味した名句とナチスのユダヤ人虐殺の関係を考察した橋本茂氏、原発問題の問いかけから現代の科学技術の問題性に迫った柴田有氏などの論考、あるいは近代国家とキリスト教との関連では、多方面にわたる賀川の防貧としての社会運動の思想を「公共の神学」として考察した加山久夫氏、一九二〇年代の中国におけるキリスト教宣教の特権放棄の問題について論及した渡辺祐子氏などの論考は、斬新な視点が盛り込まれた、今日的に示唆に富む内容である。

ナチスドイツ時代の経験を通して、ユダヤ人として、精神医として、今語りかける！
 アルノ・グリユーン「著」村橋嘉信・松田眞理子「訳」*好評発売中！

私は戦争のない世界を望む



戦争をなくすために！戦争は避けることができる。イスの心理学者アルノ・グリユーンは、「それは、私たちが考える以上に簡単なことだ」と主張する。私たちが「共感すること」を捨てない限り、「平和への夢」を持ち続ける限り、戦争を阻止することは可能である。と。

*待望の邦訳出版！ ●四六判変型・二〇〇頁・九四五円(税込)

日本聖書神学校キリスト教研究所【編】

礼拝の詞 1

待降節から三位一体主日まで

教会の礼拝を豊かにする資料の数々
 礼拝を構成する「招詞」「祈り」「罪の告白」「祝福」などを折々の教会暦に合わせて編集した「礼拝資料集」。
 * A5判・112頁・1,260円(税込)

大頭眞一●著

聖書は物語る 一年12回で聖書を読む本

一度は聖書を読んでおきたいけれど、挫折してしまうあなたに。聖書の背骨のような神と人とのガチンコの関係に焦点を当てて書かれた、かっこの聖書案内役！
 * A5判・112頁・1,155円(税込)

株式会社ヨベル YOBEL Inc.
 info@yobel.co.jp
 〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-1
 TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858
 自費出版の専門出版社

そして、最後の「実践と現場」からの貢献では、院長時代の見解を盛り込んだ久世了氏の文章は優れた内容のものである。また、病院及び大学のチャプレンの現場からの深谷美枝氏と司馬純詩氏のレポートは貴重なものであり、特に大学生によるアンケート調査の結果から、司馬氏がキリスト教教育の課題の提示と提言を行っている事柄は、共通の課題に直面しているキリスト教学校関係者にとつて有益であろう。

二一世紀の危機的な現代世界の状況の中で、学院のモットー「他者への貢献」(Do for others)を志向しつつ境界を超える多角的なアプローチを試みた本書を、心よりお勧めしたい。

(かんだ・けんじ「関西学院大学神学部教授」)
 (A5判・三四六頁・定価三六七五円(税込)・教文館)



随筆・詩歌『虹の橋』の はしがきとして

近藤蓉子

人の手の建てたる神殿「原発」の
幕裂けにけり十字架に主垂る

二〇一三年四月『虹の橋』—ヨベル—を出版しました。

「3・11」に関して詠んだ歌のひとつです。罪過渦巻く、又、天災の咎しととの下に喘あえぐ、混沌の地上の足跡……歴史、そして、宇宙と人類を厳然と導く、神の御経綸みくだちの轍……歴史、この二筋が重なり前進してゆく。この狭間はざまに立つ人草の目は、どこを凝視つめ、なにを望みみて、進んでいったらよいのだろうか。

涯はたから涯を経巡る雲、悠悠流れ又來たる碧天の高みを仰ぐ。地上に救いの慰めと希望を与える虹は、雲の中に常に置かれている（創世記九・12～13）。本の表題となりました。

私は、北海道の西南、江差という半農半漁の小さな港町に生まれ育った。一九四八年、庁立高等女学校四年を修了。戦後の新制高等学校発足の改革期に遭遇した。当時のこと、男女共学

にはかなりの抵抗が、本人は元より父も母もあった。本人の希望としては、女学校卒業後は上の学校に、ゆきたかったのだが、戦後の東京などに、若い娘をとて出せないという、父や母の思いを知っていたので言い出せなかった。さっさと女学校を後にしたのである。そんなところに、頼まれて小学校の先生に、気がつくとなっていた。当時の所謂いわゆる、代用教員である。当初、気が進まなかったが、三年間勤めた。その間に、さまざま、新しい発見が、まだ十代のアンコ椿ならぬ、アンコ先生の心を驚かせたのである。表の名は「ヨコ先生」だったが、裏の名は「アンコ先生」だったようである。当時、物資も少ない日常にも拘かまらず、子供たちは、明るく、快活であった。そしてなによりも、瞳が輝いていた。これは実に、驚きであり、この若い、未熟な教師の心を、真底、爽快にしてくれたのである。

望まずして与えられた、恩恵のひとつ、と言えよう。

休み時間は、教員室に戻らなかつたことが多かった。子供たちと、いつしよになつて、遊んでいたのである。若さもあったのであろう。しかし、教員室の年配の先生方と、お茶を飲みながらの談笑が重荷であつた、というのが当たっているかもしれない。

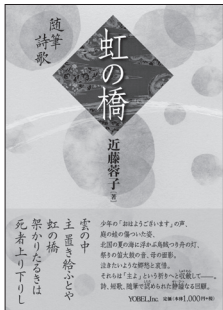
一九五一年三月退職、父母から上京の許可が出たのである。その四月、教壇から直行、昭和女子大学・英文科クラス担任と

しての高橋三郎先生との出会いが与えられた。奇しき恩恵を覚えます。「勉強の仕方を、学べればいい」……そんな生意気なことを、本気で考えていた、当時の若い自分がいた。父や母の気持ちが変わらぬうちに、入試に間に合うところ、学寮も生活指導の厳しいところ——父母の要望である。すぐ決めた。

高橋三郎先生との出会いから、聖書、そして矢内原忠雄先生の今井館聖書集會へと導かれたのでした。高橋三郎先生はよく、「星先を見上げよ」と、若き学生らに、天への視点を教えられ、卒業後も、先生から『オリブの葉』（師と旧友たちとの心の交流誌・季刊編集発行一九七八年～二〇一一年）を通して、思い

を超え、生涯教育に与ある恩恵に、誌友共々浴したのでした。

矢内原忠雄先生には、忘れ得ぬひと齣うちがあります。東大法文経三八番教室、講演會会



場の前の廊下。講演者を待つ会場は、話し声ひとつなかつた。そこに今しも入ろうとされていた先生の後姿がありました。幼い子二人を連れた私は夢中で走りより、「よろしいでしょうか」と申し上げるのが、やつの私でした。振り向かれた先生の鋭い眼光に晒さらされ、頭の中が真っ白になり、空白の時間が、実に永く感じられたのです。

「よしー」

全身に閃光が走った瞬間であります。

これが、後の私に、終ついの御門の前で聞く、主の御声への熱い希求の原動力となつたのでした。「真実と愛」、神と人との前にかくあれ。これが、矢内原忠雄先生の教えの根幹でした。

八十年余りの過ぎ来し、恩恵の実を刈り取り、夕べの感謝の祈りとしての一冊、負債者われは、捧げの贅えい何やを知らず。

(こんどう・ようこ＝主婦)

木に架かる呪のひ放免のれて付たつ広野働哭どうくのほかわが贅えいあらざれ

詩歌集『地の片隅 厨の窓から』より(二〇〇六年)

(『虹の橋』四六判・一六四頁・定価一〇五〇円〔税込〕・ヨベル)

既刊案内 (2013年8月～9月) (定価は税込)

著 訳・編 者	書 名	判型	頁	定 価	版 元	発 行 日
清 水 光 雄	民衆と歩んだウエスレー	四六	240	1,995	教 文 館	8/10
榎 本 保 郎	教会づくり入門	小B6	154	1,260	〃	8/25
日本キリスト 教 詩 人 会 編	詩華集 聖書の女性たち	B 6	144	1,785	〃	8/25
R.テイラー著 竹内一也訳	「教会」の読み方 —画像や象徴は何を意味しているのか	A 5	260	2,205	〃	8/30
越 川 弘 英	信仰生活の手引き 礼 拝	四六	160	1,365	日本キリスト 教 団 出 版 局	8/9
礼拝アイデア集 プロジェクト編	みんなで礼拝 アイデア集 —「こどもさんびか改訂版」を用いて	B 5	80	1,680	〃	8/16
並 木 浩 一	並木浩一 著作集 1 ヨブ記の全体像	A 5	338	4,200	〃	8/23
小 川 国 夫	イエス・キリストの生涯	四六	230	1,995	新 教 出 版 社	8/2
山 口 里 子	いのちの糧の分かち合い —いま、教会の原点から考える	A 5	260	2,310	〃	8/8
H.E.フォスデック著 斎藤剛毅訳	祈 り の 意 味	四六	354	2,940	〃	8/26
ジョン・バニヤン著 中村妙子訳	つ の ぶ え 文 庫 危 険 な 旅 —天路歷程ものがたり	小B6	114	1,050	〃	8/26
木 下 智 雄	イギリス人の宗教行動 —ウェールズにおける国教会制度廃止運動	A 5	272	3,150	聖 公 会 出 版	8/4
溝 口 捷 支	牧師の書斎のデボーション	四六	288	1,470	ヨ ベ ル	8/20
林 勳 三	マタイによる福音書 —1章から7章の説教	四六	226	1,890	一 麦 出 版 社	8/21
豊 田 忠 義	全キリスト教、最後の宗教改革者 カール・バルト	新書	256	1,050	キリスト新聞社	8/26
久保田十一郎	イスカリオテを解く —ユダ・ザ・イスカリオテ	A 5	330	2,100	〃	8/26
松 居 友	わたしの絵本体験	四六	244	1,470	教 文 館	9/20
松 居 友	昔話とこころの自立	四六	264	1,470	〃	9/20
松 居 友	昔話の死と誕生	四六	246	1,470	〃	9/20
L.D.ビエルマ編 吉田隆訳	『ハイデルベルク信仰問答』入門 —資料・歴史・神学	A 5	320	3,360	〃	9/30
田 村 光 三	ひかりをかかげて 岩 村 昇 —ネパールの人々と共に歩んだ医師	A 5	114	1,260	日本キリスト 教 団 出 版 局	9/20
J.L.スカ著 佐久間勤、石原良明訳	聖書の物語論的読み方 —新たな解釈へのアプローチ	A 5	210	3,150	〃	9/25
ジョン・キープル著 今橋朗編・訳	光 射 す 途 へ と —教会暦による信仰詩集	四六	194	2,310	〃	9/25
高 砂 民 宣	大 森 講 座 2 5 栄 光 の キ リ ス ト —ヨハネによる福音書の受難物語	四六	120	1,050	新 教 出 版 社	9/30
渡 辺 聡	なぜ宗教はなくならないか —ポストモダンと宗教社会学	四六	256	2,310	キリスト新聞社	9/10
古 屋 安 雄	私の歩んだキリスト教 —神学者の回想—	四六	172	1,890	〃	9/25

書店名	郵便番号	住所	電話	ファックス	URL	メール	郵便振替
北海道キリスト教書店	060-0807	札幌市北区北七条西6丁目	011-737-1721	011-747-5979	http://www.jp-shop.com	sasaki@jp-shop.com	02770-2-56520
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用	http://www7.ocn.ne.jp/~zen-book/	zeninranki_syoten@yahoo.co.jp	02350-0-874
仙台キリスト教書店	980-0012	仙台青葉区1-36 敷板センター17号F	022-223-2736	共用		fcqwks524@ybb.ne.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	平新町短箱22 千葉カシヤセンタービル	043-238-1224	043-247-3072		keisen@vesta.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.kyobunkwan.co.jp	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
聖公書店	162-0814	東京都新宿区新小川町9-1	03-3235-5681	03-3235-5682	http://www/seikokai-pub.jp/	netk-bookshop@company.email.ne.jp	00140-8-50880
アパコ・ブックセンター	169-0051	東京都新宿区西早稲田2-3-18	03-3203-4121	03-3203-4186	http://www.avaco.info	avaco@avaco.info	00130-0-96398
待農堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	03-3333-6378	http://members3.jcom.home.ne.jp/taishindo/	taishindo@jcom.home.ne.jp	00110-8-95827
キリスト教書店ハンナ	162-0814	東京都新宿区新小川町9-1	03-3269-4490	03-3269-4491		kirisu@youstotenhanna@ybb.ne.jp	00150-9-595509
バイブルハウス青山	107-0062	東京都港区南青山5-10-2	03-6418-5230	03-6418-5231		biblehouse@bible.or.jp	
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	http://www.biglobe.ne.jp/~yohdareacs/inb.html	sksch@mva.biglobe.ne.jp	00250-4-2512
清光書店	951-8114	新潟市営所通一番町313	025-229-0656	共用			00680-8-47
静岡聖文舎	420-0812	静岡市葵区古庄3-18-12	054-264-0264	054-264-4416		info@s-seibun.co.jp	0810-8-26558
名古屋聖文舎	464-0850	名古屋千種区今池5-28-4	052-741-2416	052-733-2648	http://homepage3.nifty.com/seibunsta/	nagoya-seibunsha@nifty.com	00810-5-14073
京都ヨルダン社	602-0854	京都市上京区荒神口通河原町東入ル	075-211-6675	075-211-2834		ktjordan@inbox.kyoto-net.or.jp	01010-2-594
大阪キリスト教書店	530-0002	大阪市北区曽根崎新地2-1-15	06-6345-2928	06-6345-2187	http://www11.ocn.ne.jp/~osakacs	ochtbok@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
堺キリスト教書店	591-8044	堺市北区中長尾町2-1-18	072-257-0909	072-253-6132		sakai-x@topaz.plala.or.jp	00960-9-47426
神戸キリスト教書店	650-0021	神戸市中央区三宮町3-9-18三陽ビル2F	078-331-7569	078-331-9833			01150-7-45120
広島聖文舎	730-0016	広島市中央区鞆町7-28	082-228-4914	082-223-0951			01360-4-1958
徳島キリスト教書店	770-0052	徳島市中島田町3-57-1	088-633-6335	共用	http://www6.ocn.ne.jp/~tcs/	tokushoten@shrit.ocn.ne.jp	01630-5-37119
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一町1-23	089-921-5519	089-921-5413		sksch@dokidoki.ne.jp	01650-1-2120
北州キリスト教ブックセンター	802-0022	北九州小倉北区上富野5-2-18	093-967-0321	共用	http://kcbook.net/	kcbookcenter@ybb.ne.jp	01780-4-39965
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7	092-712-6123	092-781-5484			01750-5-10932
キリスト教書店ハレルヤ	862-0971	熊本市大江4-20-23	096-372-3503	共用			017304-45044
沖縄キリスト教書店	901-2134	浦添市港川2-25-1	098-877-7283	共用	http://www.okinawacbs.com/	okinawacbs@yahoo.co.jp	020308-1283
エマオ・BOOKセンター	904-0004	沖縄市中央3-14-2	098-929-3776	共用	http://www.okinawacbs.com/	emacobs@yahoo.co.jp	

新教出版社 福音と世界

2013年12月号

特集 キリスト教平和主義と現実政治

キリスト教平和主義と憲法9条……池住義憲

アメリカの平和主義とキリスト教……高橋康浩

「私には夢がある」の再記憶……西本あづさ

紛争問題とキリスト教平和主義

……アガステイン・サリ
など

特定秘密保護法案に反対する共同声明

連載Ⅱ〈自民党改憲草案を読む〉

「日本型人権」……これでも「人権」か？

A5判・80頁・本体571円・〒68円
年間予約購読料〒共8,016円（消費税込）

キリスト教の自己批判

明日の福音のために 上村静著



ユダヤ学・聖書学に精通する著者が、イエスの福音のラディカルさから現代社会と教会を見直す。著者の研究と思索のエッセンスをまとめた一冊。

◎新書判・136頁・950円＋税

〒162-0814 東京都新宿区新小川町9-1
TEL: 03-3260-6148
FAX: 03-3260-6198

編集室から

「犬が人を咬んでもニュースにはならないが、人が犬を咬むとニュースになる」という言葉がある。これはニュースとして取り上げられる出来事はその事象の重大さよりもその新奇さに負うところが大きい、ということを示している。新奇さと重大さが重なると出来事のニュース性はよりいっそう大きくなる。

二〇一一年三月一日に起きた東日本大震災はまさにそのようなものであった。しかし、事態に進展がなく目新しさがなくなると、どんなに衝撃的であったニュースでも、やがてそのことに対する忘却が始まり、たとえば、二〇二〇年のオリンピック競技の東京での開催決定のような、新しい出来事によって取って代わられる、ということでもある。大量の情報が絶えず流入してくるのだから、新しい出来事が人々の耳目を集め、古い出来事が忘れ去られていくのは、いわば止むを得ないことである。しかし、それでも忘れてはいけないことがある。だから忘却という自然の流れにあえて抵抗する努力が時には払われる。そ

れが「東北の被災者のことを忘れてはいけない」という訴えになって現れたりする。毎年八月になると様々な形で「平和特集」がテレビや新聞などで企画されるのも、ヒロシマとナガサキに大量殺戮兵器が投下されたことと、残酷な第二次世界大戦のことを忘れまいとするためである。キリスト教の礼拝の中の聖餐（主の晩餐）という儀式も「わたしの記念としてこのように行いなさい」というイエスの言葉に基づいている。

毎週、毎年というわけではないが、出版界でも「生誕〇〇年」「没後××年」という節目ごとに記念出版が行われることがある。今年の場合で言えば、『新渡戸稲造事典』と『ハイデルベルク信仰問答』入門』が、それぞれ「没後八〇年」「四五〇年」を記念して出版された。

私たちはついつい流行を追いかけてしまいがちだが、「温故知新」という言葉が示すようにたまには過去を振り返ってみることも必要である。

（中川）

第二次大戦後の
神学運動の出発点!



加藤常昭編

4,830円

シリーズ・世界の説教

ドイツ告白教会の説教

ヒトラー政権に反対し、ナチズムと闘ったドイツ告白教会。本書では、その抵抗運動の支えとなった信仰を示す彼らの説教を収録する。

収録されている説教者
ニーマラー／ゴルヴィツァー／シュニーヴィント／イーヴァント／
デイム／フォーゲル／フォン・ポータールシュヴィンゲ／ヘッセ／
インマー／ベックマン／フォン・ラート／ハーメル／エーベリンゲ

魂の養いと思索のために

D・K・マツキム 出村彰訳 『キリスト教綱要』を読む



カルヴァンの名著『キリスト教綱要』からすぐれた言葉を精選し、その言葉に基づく黙想によって、現代人が生きるための確かな信仰の希望と人生の指針を明らかにする。

● 1,575円

新生の福音

ローマ書講解説教上

大宮 溥



「最も純粋な福音」と呼ばれるローマ書。そこに語られた核心を力強く解き明かし、悩みを抱える人々を励まし、前進する力を呼び覚ます説教集。上巻は1―8章にあたる25編のメッセージを収録。

● 1,890円

教会の社会教説

小山英之

貧しい人々のための優先的選択

教会は貧困問題をどのように考えるのか？ 現代世界に宛てられたカトリック社会教説の諸文書を精読し、貧困と不正義に対する教会の理解の発展をたどる。

● 1,260円

『星の王子さま』からの クリスマス・メッセージ

高橋洋代

● 1,050円

この物語の下敷きに聖書があることをご存知ですか？ 献辞にある親友の名前と、「王子さまの星（B-612）」を手がかりに読み解く、斬新な星の王子さま論！

新教出版社

〒162-0814 東京都新宿区新小川町9-1 Tel: 03-3260-6148 / Fax: 03-3260-6198
ホームページ: http://www.shinkyō-pb.com

クリスマスの贈り物に絵本を

せいなるよるのたからもの

クドウあや 作 / 玉井邦夫 解説

◆ A4変型・38頁
定価 1365円

日本ダウン症協会代表理事



「出生前診断」の問題をとりあげ、両親の苦悩と出産の決断、共に生きる喜びを通して、いのちの尊厳を考えます。クリスマスの意味を考えるためにも最適の内容。作者のクドウあやさんはクリスマスチャンの漫画家。代表作は『ZIPPY!』（集英社）。一児の母。



せいやくくんは、ダウン症という病気を持った子どもです。クリスマスの夜に生まれたせいやくくんは、まもなく特別支援学校の1年生。学校ではどんなすてきなことが待っているでしょうね!

原子力発電の根本問題と我々の選択



北澤宏一・栗林輝夫 著
バベルの塔をあとにして
民間事故調査委員長を務めた物理学者北澤宏一氏と原発の政治神学的暗部を別決する神学者栗林輝夫氏を中心とした白熱のシンポ。

◆四六判・定価1890円

イエス・キリストの生涯



小川国夫 著 / まえがき 加賀乙彦、解説 勝呂夙
信仰者の眼差しと文学者の感性を通して福音書を丁寧に読み解き、自らの信仰告白として語った珠玉のキリスト伝。待望の単行本化。

◆四六判・定価1995円

折られた花



日本軍「慰安婦」とされたオランダ人女性たちの声
マルゲリート・ハーマー 著 / 村岡崇光 訳
軍が強制的に「慰安婦」としたオランダ人女性たちの声を掘り起こし、彼女たちの人生に起きた出来事を丁寧に聴き取る。

11月8日 ◆四六判・定価1995円

詩篇の思想と信仰Ⅳ

月本昭男 著

詳細な語釈、各篇の構造と成り立ちの分析、そして思想と信仰についての深い洞察。古代オリエント周辺世界の宗教思想に広い目配りしつつ、ヤハウェ信仰の詩に迫る。

11月25日 第76篇から第100篇まで

◆四六判・定価3360円

一九五七年七月一七日 第三種郵便物認可
二〇一三年二月一日発行（毎月一回）一日発行
本心の扉 第六七一号 二〇一三年二月号

発行所 東京都新宿区新小川町九一ー一 一般財団法人キリスト教文書センター
電話〇三三二六〇六五〇 振替〇〇一七〇一五 二六六七
発行人 本村利春 編集人 寺田彰 印刷所 (株)平河工業社
発売所 日本キリスト教書販売株式会社 電話〇三三二六〇一五六七〇

定価七五円（税抜七二円）（〒60円）
一年分一三〇〇円（送料共）